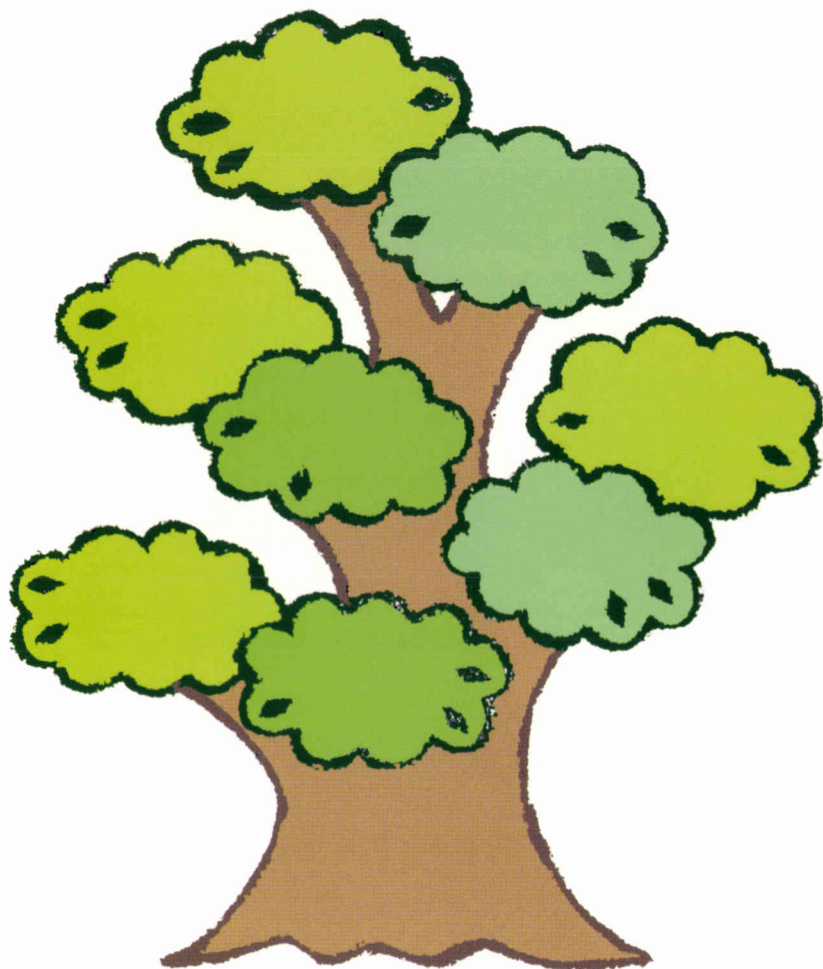


神の民
LAOS講座 第2号

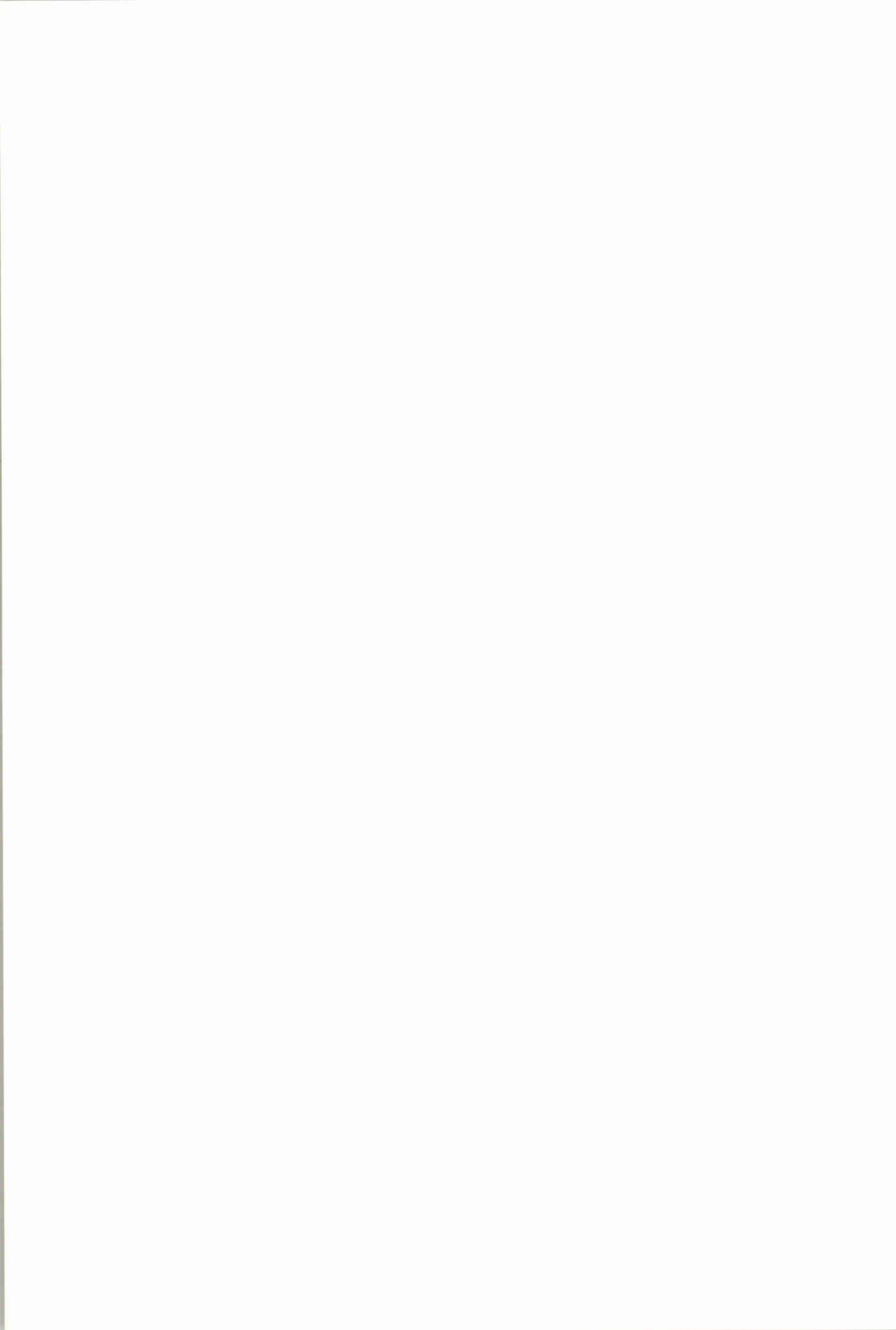


小さな一本の指

— 説教の聴き方・語り方 —



日本福音ルーテル教会



神の民 LAOSの樹

⑧「世界」の中のキリスト者

家庭と職業への召命
キリスト者と生命倫理
キリスト者と社会問題
人権・正義・平和・環境保全
情報化/グローバル化

⑦宣教と奉仕の理論と実際

教会は「宣教共同体」
神の民・「信徒と教職」
宣教と奉仕の具体像
牧会的カウンセリング
教会のディアコニア

⑥信仰継承

旧約聖書に見る信仰継承
小児洗礼と親・教保・教会の役割
堅信教育モデル
教育カリキュラム
祖先と死者の記念

③教理問答・諸信条

小教理問答書の展開
アウグスブルク信仰告白
ニケア信条と教会再一致
義認の教理とルーテル教会
日本の社会・文化の中で
信仰を告白すること

⑤教会の歴史

初代教会の歴史
宗教改革の展開
現代教会の流れ
JELCの歴史
自分の教会の歩み

②説教の聴き方・語り方

聖書日課(パトリカ-)の意味
説教の主題発見
説教の構成と表現
霊的な奉仕への召命
説教の展開としての牧会

④「聖書」とその読み方

「聖書」の読み方
救いの歴史の道筋
聖書の各書を読む
聖書とその周辺
「私」の聖書ノート

①礼拝の意味と実践

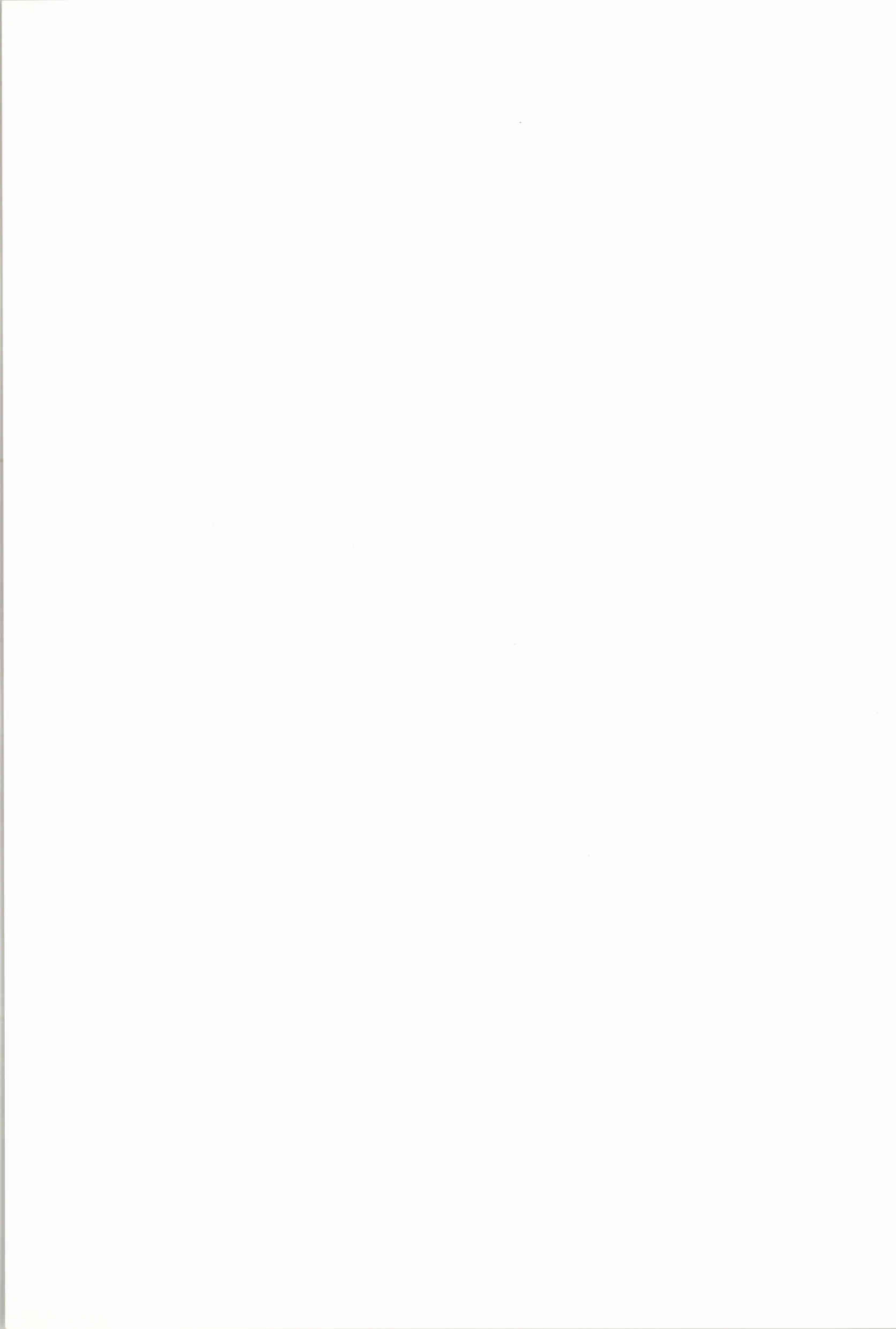
教会は「礼拝共同体」
教会の暦と礼拝
礼拝と音楽・会堂建築
式文の構成と会衆の参加
共同礼拝の司式者の役割

祈り・聖書

礼拝共同体

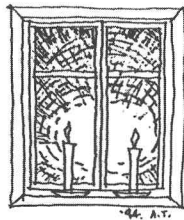
家庭と社会

宣教共同体



もくじ

★LAOS講座へのお招き	2
はじめに	4
第一回	
1. 「説教」は、仏教用語	5
2. 聖書の中の説教	7
3. 楽園に迎えられた“説教者”／まとめ・話し合い・研究	9
第二回	
4. 説教のスタイル／まとめ・話し合い・研究	13
5. 礼拝の中の説教／まとめ・話し合い・研究	17
第三回	
6. LAOSの務めとしての説教	23
7. 教職に委ねていること／まとめ・話し合い・研究	26
8. 聖霊はあなたを招いている	32
第四回	
9. 事例A 説教準備のプロセス 「人間解放の宣言」—主イエスのマニフェスト—	36
10. 事例B 信徒による説教要旨 「こころが燃える」—主との出会い—	42
★あとがき	46



LAOS 講座へのお招き

信徒としてよりよく生きるために共に成長していこう

信徒としての成長を

キリスト者として生きようと決心しました。それは、イエス・キリストを通して神さまから与えられた十字架と復活の福音を信じ、洗礼を受けて、教会の交わりの中に入れていただいたからです。求道者会、洗礼準備会での熱心な学び、兄弟姉妹に見守られながらの洗礼式でのあの感激を懐かしく思い出します。あの時言われた言葉、「洗礼はゴールではなく、スタートですよ」もまた忘れられません。しかし、その後の今日に至るまでの信仰の歩みを振り返るとき、聖書についても、信仰者としての教会と社会の中での生き方についても、もっともっと学びを深め、実践していきたいと思わないではいられません。—これは、多くの教会員の方々に共通する思いではないでしょうか。信徒としての成長、このことは自分自身にとっても、また教会にとっても、非常に大切なことです。

ルーテル教会としての決心

私たちが属する日本福音ルーテル教会（JELC）は、「福音に生き、社会に仕え、証しする」をスローガンとする、「JELC 宣教方策21」（パワーミッション21、略称 PM21）を2002年5月の総会で採択しました。福音に生かされて生きる。社会に仕え、そこに住む一人ひとりに仕える。十字架と復活の主イエス・キリストとその恵みとを大胆に証しする。そういう教会、そういう信徒になろうと教会全体で決意したのです。

全体教会の方策は、個々の教会で具体化されることではじめて実を結びますし、個々の教会でということは、一人ひとりの信徒が兄弟姉妹みなと共に手を携え、祈りを一つにしながらか、実践していくことで本当の形をとります。「キリストがあなたがたの内に形づくられるまで」（ガラテヤ4:19）、その日までともどもに信徒として成長していきましょう。パウロはこうも言っています、「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者になっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです」（フィリピ3:12）。

LAOS (ラオス) として

PM21の第二プロジェクト (P2) の目標は「証しし、奉仕する信徒になろう」です。そこで検討の結果、そのような信徒になっていくために、信徒としての受洗後の教育、生涯かけての成長のための教育のプログラムを用意しようということになりました。そして、それを「LAOS 講座」と名づけました。LAOS (ラオス)、それは、新約聖書が書かれたギリシャ語で「神の民」(ラオス・セウ) という言葉の「民」という言葉です。わたしたちは神の民、信仰の共同体、礼拝共同体、宣教共同体です。そのなくてはならない一員です。この講座の特徴は、個々の信徒の内的、霊的成長というのに留まらず、むしろ共同体の中で、共同体と共に成長する教会的信仰また生き方を目指している点です。LAOS という言葉から英語の信徒 laity という言葉もできたのですが、この講座は信徒こそ教会の中心であり、教会そのものだという考えに貫かれています。

証しし、奉仕する信徒になる

「証しし、奉仕する信徒」になっていくためには、知的な学習をすればそれで十分なわけではありません。この「LAOS 講座・第一期」でキリスト者としての基礎的な知識を習得したあと、さらに「第二期」で、より実践的な学びをして「証し」と「奉仕」を生きていく信徒へと成長していきましょう。そのためには、既存の書物から学ぶというだけでなく、実際にそのような生き方をしている兄弟姉妹からも積極的に学んでいきたいと願っています。

教会の輪の中で

「LAOS 講座」の第一期の学びは別掲の「LAOS の樹」にそのカリキュラムが載っています。その冊子を継続してご購入いただき、教会の諸集会で、学びを進めていってください。成果を分かち合い、そこで得たものを生活の中で生かし、足腰の強い信徒になっていきましょう。

2004年10月

日本福音ルーテル教会宣教方策21 (PM21)
プロジェクト2 (P2) 委員会

はじめに

わたしたちの教会で、今ほど「説教」に対する関心が高まったことはなかったように思います。もちろん、今までも説教の内容や、有名な説教者についての強い関心があったことはご承知のとおりです。しかし、それは、要するに、「牧師」の説教についての関心であり、説教という「神の民の務め」についての関心ではありませんでした。

説教は牧師がするものと決まっていました。そして、会衆は“良い”説教を牧師に期待しました。もっと“おもしろい”説教をしてほしい、もっと“分かりやすい”説教をするべきだ、もっと現代の生活に密着した話ができないものか—そのような声が、いつも教会の内外に聞こえていました。また、説教というものは、批評するべきではなく、むしろ説教を“聴く側”の信徒に、説教を“語る側”の牧師のために祈る責任があるのだ、というようなことも、よく語られてきました。しかし、説教という働きが、神から「会衆」それ自体に与えられた「務め」であるということは、それほど意識されてこなかったのではないのでしょうか。

今、日本福音ルーテル教会に属する多くの会衆は、“年間52人”の説教者を確保することが、決して当たり前のことではないという現実に向き合っています。「説教壇」の数を充たすだけの「説教者」の数がないからです。しかし、その町の中から召し集められ、その地域に福音を伝えるために派遣されている「会衆」にとって、教会の最も重要な働き場所である「説教壇」を空席のままにしておくことはできません。そこで、多くの会衆は、どのようにしたら“年間52人”の説教者を用意することができるかという課題と、真剣に取り組んでいるのです。

説教は、すばらしいものです。説教こそ、教会の宝であり、世界への希望と平和の「福音」です。それは、人間の言葉をとおして語られる、神からのメッセージです。多くの課題を抱える今日こそ、説教というものを、改めて理解し直す、好機であります。「説教の聴き方・語り方」について、個人個人で考えるだけでなく、主にある兄弟姉妹の間で共に学び合う機会が与えられますよう心から願っております。

著者 北尾一郎（大岡山教会牧師）

1. 「説教」は、仏教用語

●ラジオを聞きながら 早朝のラジオを聞きながらワープロに向かっていたときのことです。近世日本の伝統文化についてのお話の中で、耳に飛び込んできたことがありました。非常におもしろいと思って、メモを取ったわけです。

近世の「祭文」（さいもん、神社などで、神に向かって告げる文）と、「説教」（経文の意味や仏教の教えを説き民衆を教化することで、説経、説法、談義とも）と、「浄瑠璃」（三味線に合わせて語る語り物）と、この三つから、江戸末期になって「浪花節」が生まれ、それが、今の「演歌」に発展した。

●「説教」は仏教用語 「説教」（説経）は、仏教の教えを俗語で綴り、物語を交えて節（ふし）をつけてうたったもので、室町時代（14世紀）に流行しました。それが胡弓（こきゅう）や三味線などの伴奏をつけて歌われる「説経節」（せっきょうぶし）という大衆芸能になりました。さらに、江戸初期には、あやつり人形と提携した劇場演劇としての「説経浄瑠璃」に発達し、江戸中期に都市部で衰退してからも長く地方で行われました。

また、特にある仏教の宗派では、説教師とか布教師とか言われる人々がいて、重要な役割を持っています。地方によっては「説教坊さん」という言い方もあったようです。

●ほかにいい言葉は このように、「説教」という言葉それ自体は仏教の用語でありました。言い換えると、キリスト教会としては、借りてきた言葉ですから、

「説教」よりも、むしろ「福音」、「宣教」、「宣言」、「告知」というような言葉の方がいいのではないか、という意見が出されたこともありました。つまり、「説教」という「名」は必ずしも「体」を表しているとは言えないのです。

しかし、「説教」という用語は、教会で長く使われている間に、キリスト教用語になってしまったようです。もっとふさわしい言葉が見つかるまでは、「説教」という言葉を用いるしかありません。しかし、この用語が不十分なものであることを、認めておきたいと思います。それはとりもなおさず、「説教とは何か」ということを改めて考えることになるからです。

●説教とは何か

『岩波キリスト教辞典』は、「説教」を次のように定義しています（関田寛雄）。

「説教とは、イエス・キリストにおいて生じたこの世の救済の出来事を、礼拝その他において聴衆に語りかける、神から委託された教会の行為である」。

この定義には、三つのポイントがあります。

- * 何を語るのか ① イエス・キリストという方の御生涯、殊にも十字架上の死と復活において起こった、この「世界」の救いの出来事を語りかけます。
- * どこで語るのか ② 何よりも、共同の「礼拝」においてです。礼拝の延長としての小さな集会や、さまざまな場所で語られることもあります。
- * 誰が語るのか ③ 神から委託された「教会の行為」ですから語るのは「神の民」(LAOS)です。そして、教会は召された人々に委託するのです。

2. 聖書の中の説教

●最高の“説教集”

最も身近にある最高の“説教集”は『聖書』です。例えば、旧約聖書の申命記という文書も“モーセの説教集”というスタイルになっていて、「神の民イスラエル」の歴史の原点である「出エジプト」という過去の出来事をその時代に関わらせ、未来の世代に繋げています。

イザヤやエレミヤなどの預言は、キリストの来臨を指し示す言葉であるとともに、その時代の人々に対する“説教”でありました。

●シナゴグの説教

「バビロン捕囚」という苦難の時代を経て、発達したのは、「会堂」（シナゴグ）でした。その礼拝の順序は次のようなものでした

- ①告 白（申命記 6：4-9、11：13-21）
- ②律法の朗読（創世記から申命記までの五書を、156部に分け、3年で一巡）
- ③説 教（律法学者および会衆のうちのある者によってなされた）
- ④預言書朗読（数編を読み、アラム語でも）
- ⑤祝 福（民数記 6：24-26）

●ナザレの会堂で

主イエスもシナゴグにおける礼拝のなかで、聖書を朗読し、説教をされたことが、ルカによる福音書に書かれています。

イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある箇所が目にとまった。

「主の霊がわたしの上におられる。

貧しい人に福音を告げ知らせるために、

主がわたしに油を注がれたからである」。

イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。

ルカ4:16—21

神の「約束」が、今「実現」した—これこそ説教の基本的な内容です。キリストの教会は、この主イエスご自身のメッセージを、いつも新たに聴き取り、そのメッセージを教会と世界に向かって宣言するわけです。

●最高の説教者イエス

マタイ福音書の「山上の説教」から、ヨハネ福音書の「決別の説教」まで、福音書にちりばめられている珠玉のような説教を読む人は、実に主イエスこそ、最高の説教者であることを知らされます。

ヨハネ5:39
ヨハネ1:29

しかし、主イエスは「聖書はわたしについて証しをするものだ」と言われます。主イエスは「説教者」以上の方であり、説教のメッセージそれ自体です。ですから、すべての説教者は、洗礼者ヨハネがしたように、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」と語って、主イエス・キリストを指差すのです。

●説教者は“一本の指”

説教者は、何か自分の思想を語るものではありません。キリストを指し示すだけです。説教者は、一本の小さな「指」であることで満足するのです。また「荒野野で叫ぶ者の声」であることを願うのです。それは単純なことでありますが、容易なことではありません。説教者も「人間の思い」にとらわれることがあるからです。

3. 楽園に迎えられた“説教者”

●ゴルゴタの丘で

どなたもご存じではないでしょうか—世界で最もよく知られた無名の犯罪人を。

それは紀元30年ごろ、ゴルゴタの丘で十字架につけられた彼が、恐ろしい苦しみの中にいた時のことでした。十字架につけられたもう一人の仲間の声が聞こえました—「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」。そのとき、この無名の犯罪人は、思わずこう言いました—「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない」。

ルカ23:39

ルカ23:40—41

●無名の“説教者”

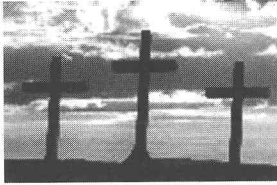
彼は、自分の罪を知っていました。彼は神を恐れていました。刑罰を受けることを受け入れていました。そして、何よりも、真ん中の十字架につけられている方が、罪のない方であることを知っていました。この方が、神から遣わされた方だと気づいていたのです。そして、仲間に向かって、主イエスに目を向けるように勧めたのです。

それから、彼は、主イエスに向かって言いました—「イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」。主イエスに向かって、彼が言えたことは、これがせいっぱいでした。しかし、彼は驚くべき言葉を耳にします—「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」。

ルカ23:42

ルカ23:43

彼は、仲間の犯罪人に向かって“説教”しただけではありません。あの出来事後、この記事を読む無数の魂を揺り動かしてきたのです。



十字架の上から主イエスと共に「樂園に」迎えられたこの犯罪人を、素晴らしい“説教者”にしたのは、彼の知識や教養ではありません。彼の正しさと信心深さでもありません。彼は、とにかく、人生に失敗した人だったのです。

その彼の心の中で、どのような動きがあったのかは定かではありませんが、終わってみれば彼は、無類の“説教者”とされていたのです。十字架の上で、神の義と愛を仰ぎみる心を彼に与えたのは、聖霊である神でした。仲間に語るべき言葉、主イエスに言うべき言葉を与えたのも、聖霊である神ご自身でした。

●自分の力ではなく

説教をする人は、だれでも彼と同じです。聖書の本文を繰り返し読むときも、さまざまな準備をし尽くして説教壇に立つときも、説教者は自分の力で何かをすることはできません。聖霊である神にすべてを委ねて、自分の思いではなく、聖書の思いを語ろうとするのです。

ですから、本当に説教するのは、聖霊なる神ご自身であります。説教を聴くわたしたちが、安心して聴くことができるのはそのためです。また、説教をするわたしたちが、勇気をもって説教をすることができるのも、そのためです。

●聖霊によって語る

ヨハネ15:26-27

主イエスは、言われます—「父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方はわたしについて証しをなさるはずである。あなたがたも…、証しをするのである」。

使徒パウロも、コリントの教会に宛てた第一の手紙の中に書きました—「聖霊によらなければ、だれも、『イエスは主である』とは言えないのです」。

一コリント12:3

〈まとめ〉

真の説教者は聖霊である神

説教者は、自分の力で説教壇に立つのではない。聖霊である神に、すべてを委ねて、自分の思いではなく、聖書の思いを何とかして語ろうとするのである。聖霊によらなければ、だれも、説教をすることはできない。真の説教者は聖霊ご自身である。

〈話し合いのために〉

- ① 説教を聴くことも、説教を語ることも、自分の力によってできることではない、ということは、あなたに勇気を与えますか。
- ② 聖霊によって語るということは、準備をしないで説教をするという意味でしょうか。

〈研究のために〉

- ① 『コリントの信徒への手紙一』15章1-11節に書かれている福音の要点を、書き出してみましょう。それが、「ケリュグマ」（宣教の要点、説教のアウトライン）の一例です。
- ② 『使徒言行録』の中にある「説教」を探しましょう。
 - ・ペトロのペンテコステ説教
 - ・殉教者ステファノの説教
 - ・コルネリウスの家でのペトロの説教
 - ・ピシディア州でのパウロの説教
 - ・リストラでのパウロの説教
 - ・アテネでのパウロの説教
- ③ 改革者マルティン・ルターの言葉を味わい

ましよう。

「しかり、わたしは説教を聴く。しかし、
いったい誰が語っているのか。牧師か。いや、
そうではない。牧師に聴いているのではない。
なるほど声は牧師のそれである。が、
わたしの神が、そこで説教され、話される
御言葉を語りたもうのである。それゆえに、
わたしは、御言葉のよき学徒となるために、
神の言葉をうやまわねばならないのである」。

(1540年9月11日ヨハネ福音書4：9-10
をテキストにして行った説教から)



ウィッテンベルク城教会

4. 説教のスタイル

●「講解説教」

伝統的な説教には、おおまかに分けると二つのスタイルがあります。一つは、旧・新約聖書の本文に即して、そのメッセージを説き明かすもので、ラテン語では、ホミリア (homilia) と言われました。いわゆる「講解説教」です。

●「主題説教」

もう一つの傾向は、信仰生活や社会の問題をテーマにして、聖書を引用しながら、キリスト教の立場を明らかにするもので、ラテン語ではセルモー (sermo) と言われました。これが、いわゆる「主題説教」です。

●ルーテル教会では

ルーテル教会で、実際に行なわれている礼拝説教は、このどちらかに属する場合がありますが、多くの場合、どちらとも言えないのではないかと思います。むしろ、第三のスタイルであると考えられます。

ルーテル教会は、「みことばに立つ教会」という自己認識を持っています。中世の教会には説教に対する消極的な傾向があり、聖餐に重点が置かれていました。16世紀に起こった改革運動は、マルティン・ルターの聖書と説教に対する新しい考えから始まりました。

当時の教会では、マリア崇拜、諸聖人崇拜、聖遺物崇拜、聖地巡礼、「煉獄」の教え、ローマ教皇によって発行された贖宥券（免罪符）など、信仰者と神との間に多くのものがあると考えられていました。そして、そうした主題についての説教が行われていました。

●福音の説教を

ルターは、「教会の真の宝は、神の栄光と恵みとのもっとも聖なる福音である」（九十五箇条の提題第62項）と言っているように、ただキリストを信じる信仰を通して受け取る神の恵みによって、わたしたちは救われるのだ、と考えました。

説教されなければならないのは「神の言葉」であり、「神の言葉」は聖書に書かれている、とルターは言います。神学を修めたのち、ようやく聖書を読むことを許されたルターは、聖書（特にローマの信徒への手紙）の中で「信仰による義人は生きる」という真理を発見し、ずっと探し求めていた「恵みの神」に出会ったのです。これが、救いの道としての「神の義の再発見」であり、「塔の体験」と呼ばれています。

口語訳ローマ1:17

このように、「聖書」に基づいた「福音」の説教をするということが、ルーテル教会の伝統となったのです。聖書の中で語られるキリストの言葉は、「神の言葉」(みことば)として、そのまま信頼をもって受け取るべきものだ、という態度であります。

●「みことば」の意味

「みことば」には、三重の意味があります。

① 「みことば」の本質としてのキリスト

ヨハネ福音書は、イエス・キリストのことを神・先在者・創造者・啓示者・受肉者としての「言」(ロゴス)として語っています。またヘブライ人への手紙は、「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました」と書いています。

ヨハネ1:1-18

ヘブライ1:1-2

② 書かれた「みことば」としての「聖書」

「みことば」の本質であるキリストの出来事についての「神の約束」(旧約)と「約束の実現」(新約)というかたちで書かれた文書の集成が「聖書」です。ですから、「聖書」は、「書かれたみことば」と呼ばれます。

③ 語られる「みことば」としての「説教」

「聖書」は、しかし、朗読され、説き明かされるとき、生きて働くものとなります。礼拝の中で、聖書の朗読と説教の持つ重要性は、申し上げるまでもありません。

●教会暦と聖書日課

聖書と説教との間には、このような深い関係があることからすれば、ルーテル教会の説教は「講解説教」である、とも言えそうです。

ところが、ルーテル教会の説教に、もう一つのはっきりした性格を与えてきたものがあります。それは、教会暦に従って配列された朗読聖書集(聖書日課)であります。ギリシア語で、ペリコペー(perikope)と言います。これは、5世紀に遡るといわれ、ローマ・カトリック教会ではこの聖書箇所が朗唱的に歌われました。ルーテル教会では、「みことば」としてのペリコペーこそが礼拝の中心であるという確信から朗読されたり、歌われたりするようになりました。

そして、このペリコペーに基づいて行われる説教が、ルーテル教会の説教の基本的な性格となったわけです。ペリコペーは、教会暦の主題に従って配列された聖書の箇所ですから、ここにある種の「主題説教」の要素を見ることができます。しかし主題は説教者の主観で決めるのではなく、ペリコペーによって与えられます。



● 「ペリコペー説教」

そこで、伝統的にルーテル教会の説教は、講解説教と主題説教との要素を同時に持っているとも言えます。しかし、これを第三のスタイルと考えるなら、「ペリコペー説教」と呼ぶこともできるのではないのでしょうか。

〈まとめ〉

ルーテル教会の説教の性格

「みことばに立つ教会」であるルーテル教会の説教は、「聖書」の本文に即して福音を聴き取ろうとすると共に、教会暦に従って配列された聖書日課に基づいて行われる「ペリコペー説教」である。

〈話し合いのために〉

ペリコペー説教について、次のようなことが言えるでしょうか。

- ① 説教者が、自分で聖書の個所を選ばないので、説教の主題の客観性が保たれる。
- ② 礼拝において、聖書を全体的にバランスをもって読むことができる。
- ③ ペリコペーを尊重しつつ、適切な時期に使徒書の連続講解説教等を行うことができる。
- ④ 教会暦の主題と聖書日課が与えられても、本文の理解と霊的な洞察は、説教者に委ねられている。

5. 礼拝の中の説教

●礼拝の中心は

「説教」は、おもに「公同礼拝の中で」行われるものです。楕円形に二つの中心があるように、礼拝にも二つの中心があります。前半部は「みことばの部」であって、その中心は、おもに福音書を主要日課とするペリコペーの朗読です。そして、後半は「聖餐の部」であり、聖餐を設定する主のみことばです。この二つの部分は共に「みことば」であって、分離することができません。

●聖書朗読と説教

つまり、礼拝は、全体が神の「みことば」によって結ばれています。「説教」は、その前半部において朗読される「みことば」に奉仕するものであります。それゆえに、説教自体も、聖霊である神のお働きによって、「みことば」として用いられる、と考えることができます。

なぜなら、説教は、その日のみことばに奉仕し、みことばを“ひもといて”「説き明かす」と共に、主の救いのみことばを「宣言し」、また、主の御業を「証しし」、また、みことばによって生きるように「奨励する」からです。

●説教の主題の発見

ですから、「説教」の主題は、その日の礼拝の主題によって決定されます。そして、その主題は、ペリコペーの中に示されているのです。ある意味で、説教者は、ペリコペーとして選ばれている聖書の個所から、礼拝と説教の主題を“発見”するという作業をします。説教を聴く人も、語る人も、次の主日の日課をよく読むことによって、礼拝の準備をするわけです。

●チャートにします

「説教の主題の発見」について、これまでに
お話したことをチャートにしてみましょう。

福音の要約

(ケリュグマ)

- (1) 旧約聖書の約束の実現
- (2) 先駆者ヨハネの活動
- (3) 洗礼によるメシアの即位
- (4) 主イエスの宣教と奉仕
- (5) 苦難と十字架の死と葬り
- (6) 復活と昇天と再臨
- (7) 聖霊降臨と教会
- (8) 罪の赦しと永遠の命



教会暦

主の半年 : 待降→降誕→顕現→受難→
復活→昇天→聖霊降臨
教会の半年 : 聖霊降臨→聖霊降臨後
(教会・信仰・愛・希望)

LAOS 講座第1号「礼拝の
意味と実践」14-20頁参照



礼拝の主題



ペリコペー



説教の主題・タイトル

●ペリコペーの仕組み

もう少し、「ペリコペー」のお話をします。「ペリコペー」には二つのタイプがあります。

① 一年サイクルの「歴史的ペリコペー」

初代教会の時代から積み上げられてきた、この「ペリコペー」によって、一年間のそれぞれの「主日」に、固有の主題・テーマが与えられることになりました。

日本のルーテル教会でも、1975年ごろまで使用されていました。“一部改訂”される前の『教会讚美歌』の巻末にある「教会暦に適する讚美歌」というリストに出ている聖書の個所が「歴史的ペリコペー」です。

② 三年サイクルの「ペリコペー」

これが、現在、多くの教会で使われているペリコペーです。現在では、諸教派で世界的に用いられています。福音書を次のように配分することで、かなり通読に近くなります。

A年＝マタイ＋ヨハネ＋（ルカ）

B年＝マルコ＋ヨハネ＋（ルカ）

C年＝ルカ＋ヨハネ

西暦を3で割った余りの数が、

A年は1

B年は2

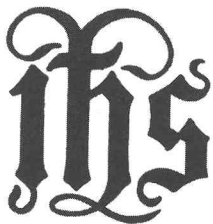
C年は0

となります。

●三年サイクルの特長

ペリコペーが「三年サイクル」になった背景には、各福音書の特徴を明らかにする聖書学の発展があります。マタイ・マルコ・ルカの構成が、教会暦の構成の基礎となっていますので、三福音書をA/B/C年に配分することによって、各福音書の特徴が生かされます。

ヨハネ福音書にも、独自の記事がありますので、どの年も、降誕祭、受難週、復活節に読みます。また、A/B年にも一部ルカが読まれるのは、クリスマスとその前後の礼拝に、ルカにしかない記事（1、2章）が必要だからです。



また、三年サイクルにすることによって、使徒書（福音書以外の新約聖書）と旧約聖書の多くの個所に触れることにもなります。

三年サイクルのペリコペーは、一部改訂された『教会讚美歌』の巻末、また『ルーテル教会式文』の巻末に出ています。単年度のものは、お手元の『教会手帳』や『聖書日課』にも。

●52回の読切り連載

ペリコペーによる説教は“読み切り連載”にも似たところがあります。一回ごとにまとまってはいますが、やはり“52回”全体を聴くことによって、キリスト教会が今日の世界に何を伝えようとしているかが分かるのです。

それは、一回だけの説教では意味がないということではありません。説教の中の一つの文章によって、神のメッセージを受け取り、神との信頼関係に導かれることもあります。しかし、全体を聴くことの豊かさはまた格別なのです。

〈まとめ〉

説教は「みことば」に奉仕する

「説教」は、その日のペリコペーに示された「みことば」に奉仕する。みことばを“ひもといて”「説き明かす」と共に、主の救いのみことばを「宣言」し、また、主の御業を「証し」し、また、みことばに信頼して生きるように「奨励」する。

〈話し合いのために〉

- ① 「週報」などに、次の主日のペリコペーが

書かれていることがあります。それは、何のためでしょうか。

- ② 「説教の主題を発見する」作業は、説教者だけがすべきものでしょうか。
- ③ 礼拝に出席できない日の説教を、聴きたいと思っていますか。そのために、会衆としてまた個人として、どんなことができるでしょうか。

〈研究のために〉

- ① 「ペリコペー」という言葉は、ギリシア語で、“本の一部、断片”を意味しています。つまり、『朗読聖書集』という本は、 $52+\alpha$ の“断片”からなっているので、その一つ一つが「ペリコペー」と呼ばれたのでしょう。また、このシステム自体も「ペリコペー」と呼ばれるようになったのだと思われま

すが、日本語には、「聖書日課」という言葉もありますが、“日課”は365日を意味しますので、「聖書日課」という名称は、毎日読む箇所を配列したシステム（ローズンゲン）に、譲った方がいいのではないのでしょうか。

そこで、“聖書週課”か“主日聖書日課”か、それとも片仮名の“ペリコペー”か、という三つの中で、どれが適切でしょうか。

- ② 教会暦における「教会の半年」と呼ばれる聖霊降臨後の期節などに、聖書の特定の文書を取り上げて「連続講解説教」をする場合があります。

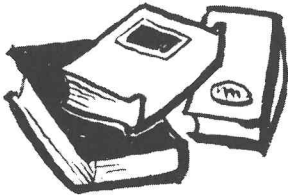
その場合も、ペリコペーを生かしながら、

その期節に連続的に用いられている使徒書などを取り上げることが一案でしょう。

しかし、「共同礼拝の中の説教」であるということが、基本的なことです。「福音」を宣言する「みことば」に奉仕することこそ、「説教」の務めなのですから。

- ③ 旧約聖書を主日共同礼拝で朗読することは初代教会の礼拝においては大きな部分を占めていました。しかし、次第に新約聖書の比重が増し、4世紀ごろには、「旧約聖書・使徒書・福音書」という形ができました。

ところが、その後旧約聖書の比重が減り、「使徒書・福音書」の二朗読時代が長く続きました。再び旧約聖書の日課が朗読されるようになったのは、20世紀の後半になってからであると考えられます。日本福音ルーテル教会の場合、1960年を過ぎてからのことでした。



新約聖書自体が、「キリストの出来事」を神の御約束の実現（預言の成就）として受け取り、メッセージの根拠を旧約聖書に求めていることは、ご存じのとおりです。つまり、新約の人々にとって、「聖書」とは旧約聖書であったことを忘れてはならないのです。

特に、日本のような異教社会の中で宣教するキリスト教会は、「創造」と「祝福」という旧約聖書の基礎概念をしっかりと示して、すべての人間の創造主である唯一の神による救いの福音を証しする必要があります。

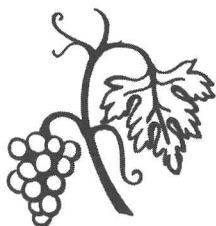
6. LAOS の務めとしての説教

● LAOS・神の民

巻頭にある「LAOS 講座へのお招き」という文章、また「LAOS 講座」創刊号をお読みくださったことと思います。

そこに、書かれていることですが、LAOS (ラオス) とは、ギリシア語で「神の民」(ラオス・セウー) という言葉の「民」を意味する言葉です。

LAOS について述べている新約聖書の代表的な箇所を読んでおきましょう。



あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。あなたがたは、

「かつては**神の民**ではなかったが、
今は**神の民**であり、
憐れみを受けなかったが、
今は憐れみを受けている」

一ペトロ 2:9-10

のです。

● 神の民の使命は

使徒ペトロは、「かつては神の民ではなかったが、今は神の民である」という預言者ホセアの言葉を用いて、「キリスト教会」を救いの歴史の中にしっかりと位置づけました。

そして、この「神の民」の使命は、「暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、**広く伝える**」ことにあるとしています。つまり、「宣教」こそ教会の使命である、と言うのです。

「広く伝える」という言葉は、「宣言する」という意味ですが、それは、「説教」の持つ基本的な働きです。新約聖書時代の教会は、宣教の働き、また説教の働きを、特定の人々だけに限定してはませんでした。むしろ、「使徒」ではないステファノやフィリポが、どれほど重要な働きをし、どれほど素晴らしい“説教”をしたかは、使徒言行録に明らかです。

使徒6:1—8:40

●説教は神の民の務め

説教の「務め」は、特定の“専門家”としての「教職の務め」ではありますが、基本的にはむしろ「神の民」としての「教会」の務めであり、「LAOSの務め」であります。

「教会の務め」と言うとき、わたしたちは、どんなことをイメージするでしょうか。何となく抽象的に考えているのではないのでしょうか。「教会」は、「神の民」全体でありますから、
ニケヤ信条 “唯一の、聖なる、公同の、使徒的な、教会”
をイメージするのは、もちろん、正しいことです。しかし、具体的には、「神の民」の“枝”の一つである“会堂共同体”の職務として理解する必要があると思います。

個々の会衆は、「礼拝共同体」であり、また「宣教共同体」です。福音の「説教」は、このように、「共同体」としての「会衆」の職務である、ということになります。

別の言い方をしましょう。「LAOS」は、“教職である**信徒**”と“教職ではない**信徒**”のすべてを含んだ「神の民」です。それですから「LAOSの務め」としての「説教」は、“教職ではない**信徒**”の責任でもあるわけです。

●原始教会の信徒

『LAOS 講座』創刊号に書かれていることですが、アラン・リチャードソンは新約聖書時代の状況について次のようにまとめています—「洗礼は、いわば、王の系統を引く祭司の新しいメンバーの授任接手であった。新約聖書の意味における信徒、すなわち、LAOS の一員としての信徒とは、奉仕の責任を何も持たずに、伝道と牧会という自分の任務を、有給でその任務を果たす専従のキリスト者たちに、委ねてしまった、(近代の用語で言う) 教会員のことでは決してない。すべての信徒は…この用語を聖書的な意味で用いるなら、イエス・キリストの教会の祭司であり、奉仕者である。また、すべての奉仕者は等しく“信徒”である」。

LAOS 創刊号33頁

後藤光三も次のように書いています—「原始教会においては、礼拝に信徒も役割を持った。歌に、祈りに、聖書朗読に、時には説教も分担した。しかし中世の教会においては、まったく消極的、受け身の位置におかれてしまった」。

『説教学』65頁

●宗教改革の精神

しかし、マルティン・ルターをリーダーとする16世紀の宗教改革は、先に述べたように、新約聖書の福音理解を回復することによって生じた礼拝の改革であり、「みことば」に仕える説教の復興であり、礼拝における会衆の復権でありました。

会衆は、再び積極的な位置を与えられるようになりました。聖書は母国語で朗読され、説教によって説き明かされました。聖餐は、パンとぶどう酒の二種陪餐となり、式文も母国語になりました。讚美歌は専門家集団の演奏から、会衆が喜びをもって歌うものとなりました。

7. 教職に委ねていること

- 全信徒祭司性のこと 宗教改革によって、「全信徒祭司性」と言われる原理が明らかになりましたが、これは、新約聖書の教えに一致するものであります。最近では、ローマ・カトリック教会の「信徒使徒職」という言葉もよく耳にしますが、基本的には、同じような考え方です。



ルーテル教会の「全信徒祭司性」は、教職と信徒との区別があることを前提にしています。しかし、その区別は、身分的な区別ではなく、機能的な区別、職務上の区別です。

そして、教職への召命は、二重の意味を持っています。第一に、それは、だれも自分で自分を召命することはできず、神からの召命を受けて教職とされるという意味です。

しかし、第二に、だれも自分で自分を召すことはできず、教会による「正規の召し」によって教職とされる、という意味であります。

- LAOS は委託する LAOS としての「宣教共同体」は、宣教の働きを、あくまでも神から LAOS 全体に委ねられた職務として受け取りつつ、LAOS 仲間の幾人かのメンバーに、LAOS を代表して、その職務を果たすように委託するのです。

その際に大事なことは、LAOS としてのわたしたち自身が、主体的な「委託者」であることを決して忘れてはならないということです。

職務を「委託された」教職は、自分自身も委託者である LAOS の一員であることを片時も

忘れることができません。神と神の民とによる委託に、聖霊の助けによって誠実に応えようとする思いに充たされるのです。そのような教職の思いを支えるのは、「教職」のために日々ささげられている「会衆」の祈りです。

●信徒の霊的な奉仕

LAOS が、働きを委託する相手は、職制の中にある「教職」だけではありません。“教職ではない信徒”の中で、牧師と教会役員会の呼び掛けに応じて、礼拝の司式・聖書朗読・配餐補佐・説教などの「霊的な奉仕」を申し出る兄弟姉妹に、役員会の決議によって、また、必要に応じて公同礼拝における就任式をするという形で、そうした職務を「委託」するのです。

すでに一般的になっているのは、教会役員・教会学校教師・礼拝奏楽者・聖歌隊員・指揮者などの奉仕がありますが、こうした働きも、やはり「霊的な奉仕」であると言えます。

●信徒の説教奉仕

こうした奉仕は、どれをとっても大切なものですし、奉仕をしながら、研修・訓練を重ねるべき働きです。中でも「説教」は、特に、訓練を必要とする奉仕ではあります。

しかし、説教者としての訓練は、終わりのないものでありますから、“教職である信徒”も“教職ではない信徒”も、ある程度の準備をして、とにかくスタートするしかないので。

日本福音ルーテル教会において2006年から実施に移される「信徒説教者制度」による奉仕については、実施要項に基づいて必要な研修を進めることとなります。この制度以前の準備的な「説教奉仕」の場合も、研修を積み重ねるために、共に努力したいものです。

●教職に委ねること

「宣教」が LAOS の使命であり、「説教」も基本的には LAOS の務めであり、霊的な奉仕を“教職ではない信徒”にも委託するということであるなら、“教職である信徒”に「特に委託する」ことは、どんなことでしょうか。

- (1) 「教職」には、常に「福音の真理」に立つ“預言者的な見張り”として、教会と世界に仕える「奉仕者」としての働きを委ねています。
- (2) 「教職」には、自ら「みことばへの忠実な奉仕者」であると共に、多くの信徒を霊的な奉仕に向かわせる“誠実な同伴者”としての働きを委ねています。
- (3) 「教職」には、共同礼拝と牧会的場面で、洗礼と聖餐という“聖礼典の正しい執行者”としての働きを委ねています。
- (4) 「教職」には、信徒の協力を得ながら、信徒・求道者・近隣の住民一人ひとりの声の信頼できる“聴き役”、また「魂のケア」をする“牧会者”としての働きを委ねています。
- (5) 「教職」には、「LAOS の務め」としての宣教と奉仕に、率先して携わるだけではなく、信徒それぞれに与えられている多様で豊かな賜物を生かす“公平な調整者”としての働きを委ねています。
- (6) 「教職」には、LAOS の使命に関する基本的な考え方、教会のプログラムについての先取的な意識をもって、信徒の主体性を尊重しながら会衆を導く“会衆の指導者”としての働きを委ねています。
- (7) 「教職」には、一つの「システム」である教会組織に奉仕し、同労者と協力する“実務



的な管理者”としての働きを委ねています。

〈まとめ〉

「説教」は、LAOS の務め

説教の「務め」は「教職の務め」ではあるが、基本的には、むしろ「神の民」としての「教会の務め」である。「宣教共同体」であるLAOSは、説教の働きを、あくまでも、神からLAOS全体に委ねられた職務として受け取りつつ、その職務をLAOSを代表して果たすように、「教職である信徒」に委託する。また、“教職ではない信徒”にも、それにふさわしい仕方でも委託する。

〈話し合いのために〉

- ① 神が愛しておられるこの“世界”に触れている信徒が「説教」をする場合、ペリコペーに基づきつつも、職業人・家庭人として聴き取る福音を語るができるでしょうか。
- ② 礼拝などで、説教とは別に行われる「証」や「講演」にも、役割があるでしょうか。
- ③ 信徒が「説教」の準備をするとき、聖書の解釈や、主題の理解について、牧師に相談しつつ、要旨を書き上げるようにすれば、安心して奉仕できるのではないのでしょうか。
- ④ 多忙な信徒が、説教の準備を進める場合に電子メールなどを利用して、牧師との対話を進めることができるでしょうか。

〈研究のために〉

① 教会学校の生徒や、教会関係の幼稚園・保育園・学校・社会福祉施設の関係者がおもに参加する礼拝を、原則としてペリコペーに基づく「説教」が行われる一つの「礼拝」として位置づけることができないでしょうか。

② 説教のスタイルには、いろいろあります。C年の四旬節第4主日のペリコペーを例に考えてみましょう。

第一の日課：イザヤ 12：1－6

第二の日課：第1コリント 5：1－8

福音書：ルカ 15：11～32

(放蕩息子のたとえ)

Aタイプ — 「伝道的説教」

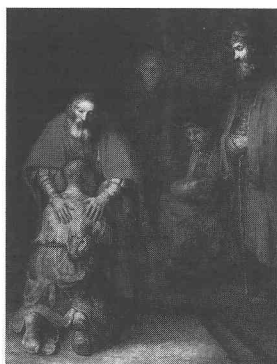
このタイプの説教では、多くの場合「弟」が主人公になります。従って、人間の神からの離反、人生の危機、悔い改め、神のもとへの復帰、神の愛、人間の復活と救い、というようなポイントが、テーマとなります。いわば、“救済論的説教”です。

Bタイプ — 「主題的説教」

一つの構想としては、この「たとえ」を、『法華経』にあるよく似た物語と比較することによって、「人格の完成」を求める仏教の「悟り」の道と、キリスト教「福音」の「神の恵みによる救い」の道との共通点と相違点を、分かりやすく提示することもできます。“教理的説教”です。

Cタイプ — 「講解的説教」

この「たとえ」を解説するタイプの説教は当然のことながら、このたとえを、単独で扱うこ



とはしないでしょう。ルカ15章全体の“枠組み”を示す1～3節の趣旨に従って構成することになります。「弟」に象徴される「徴税人や“罪人”」と“食事まで一緒にしている”ということが、「兄」に象徴される「ファリサイ派の人々や律法学者たち」の批判でした。それに対する主イエスの反論が、“失われた羊・銀貨・息子”という三部作です。この「たとえ」は、「兄」のような人々に対して語られているわけです。つまり「教会のあるべき姿は何か」を示す、このような説教は、いわば“教会論的説教”です。

Dタイプ — 「物語的説教」

子どもたちがおもな聴衆である場合には、「物語」そのものを生き生きと話すことによって、聖書のメッセージを伝えることができます。しかし、説教者がどのような角度からこの「たとえ」を理解するかによって、話の内容も違ってきます。誰にスポットを当てるかということです。このタイプでは、「父」を中心として話すことが適当でしょう。

Eタイプ — 「ペリコペー説教」

復活祭に洗礼を受けるための準備をしている求道者に、「キリストに従う」ことの意味をまとめて教えるために選ばれているのが、「四旬節」のペリコペーです。三つの日課から主題を見定めます。イザヤ書は、主への感謝と賛美の歌であり、コリントの信徒への手紙第一は「わたしたちの過越祭」である聖餐について述べています。福音書は「恵みによる祝宴」を開く神の憐れみと愛を語ります。

8. 聖霊はあなたを招いている

- まず聞くことから 公同礼拝は、キリスト者のライフスタイルの基本です。すべては「礼拝」から出発します。礼拝では、ありのままの自分を、聖なる神の御前に投げ出して、会衆と共に「ごんげ」をし、祈ります。また、三位一体の神を賛美します。そして、ペリコペーの「聖書朗読」と「説教」によって「みことば」を聴きます。そうです。使徒パウロが言うように、「実に、信仰は聞くことにより、しかもキリストの言葉を聞くことによって始まるのです」。

ローマ10:17

- 聖書は無尽蔵の宝 キリスト教会の素晴らしい点は何か、と問われるなら、いくつも挙げることができるでしょう。まず言えるのは、「聖書」が会衆一人ひとりの手にあるということです。「聖書」には、一度かぎりの人生を祝福する素晴らしい“宝”が詰まっています。決して掘り尽くすことのできない“无尽蔵の宝”が埋蔵されています。

礼拝に参加するだけで、聖書朗読と説教をとおして、わたしたちはこの“宝”を受け取ります。しかし、自分自身で“宝”を掘り当てるなら、その喜びは、ずっと大きくなるでしょう。

- かのエチオピア人も そのような作業は、独りですることでもできます。そう言えば、馬車の上で、独りイザヤ書を読んでいた、かのエチオピア人もそうでした。しかし“信徒伝道者”フィリポが「主の天使」によって彼のところに派遣されました。フィリポが、「読んでいることがお分かりになりますか」と言うと、女王の全財産の管理をする高官であった、かのエチオピア人は答えるのです。

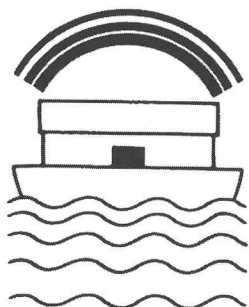
「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」。

●共に祈り、共に学ぶ

この場面は、「聖書を学ぶ会」「聖書に聞く会」「聖書研究会」などの原型です。二人以上の仲間と「共に学ぶ」機会を作り、積極的に利用することが、どんなに大事かは、実際に参加してみれば、どなたも経験することです。

特に仕事も立場も、持っている情報も、いろいろ違う仲間が、共に祈り、共に一つの聖書を囲むことによって、それまでぼんやりとしか見えていなかった聖書の言葉が、次第に七色の光に輝いてくるのが分かります。

そして、そのような場面の“世話人”となることが、教会役員はじめ、経験豊かな信徒の役割であります。教職は、神学と聖書学の一応の訓練を受けておりますから、資料を準備することや、解説をする役割を担います。しかし、教職が資料を提供すれば、信徒の幾人かが交替で発題を準備することもできるのです。



●聴く喜び、語る喜び

献身的な信徒は、主日ごとに礼拝に参加し、聖書朗読と説教によって、神の「みことば」を「聴く」のを「喜び」としています。もちろん“見える福音”である聖餐に与ることも大きな喜びです。ある成熟した信徒が「わたしは礼拝を“楽しんで”います」と言われたとき、わたしは、“目からうろこ”の思いでした。

使徒9:18

「説教」の務めは、決して容易なことではありません。ある意味では、そもそも、人間には不可能なことです。しかし、神は、塵のようなわたしたちを、御子、主イエス・キリストのゆえに、憐れみをもって赦し、聖霊の力によって

「みことば」を「語る」喜びへと導いてくださいます。

●モーセの願い

それにしても、「みことば」を「語る」ことは、教職として選ばれた人たち「だけ」に委託されたことではないのか、という“声”が聞こえてきます。

そのような“声”は、出エジプトの時代にもありました。「神の民」イスラエルが、エジプトを出た翌年、荒れ野で「肉が食べたい」という不満が高まり、指導者モーセは非常に苦しみました。神は、モーセの訴えに応じて、民の重荷を共に負うために70人を集めるように言われました。モーセは、長老の中から70人を集め、「臨在の幕屋」の周りに立たせます。

民数記11:1-24

神は、「モーセに授けられている霊の一部を取って、70人の長老にも授けられ」ました。そのとき、宿営に残っていた長老が2人ありました。彼らの上にも、霊がとどまり、預言状態になりました。そのことを聞いたモーセの従者ヨシュアが、思わず「やめさせてください」と言ったとき、モーセは、こう答えたのでした。

民数記11:25-30

「あなたはわたしのためを思つてねたむ心を起こしているのか。わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ」。

民数記11:29

●パウロの願い

使徒パウロは、コリントの教会に宛てた手紙の中で、“預言”するための霊的な賜物を熱心に求めるように奨めています。「異言を語る者は、人に向かってではなく、神に向かって語っています。それはだれにも分かりません。彼は

霊によって神秘を語っているのです。しかし、預言する者は、人に向かって語っているのです、人を造り上げ、励まし、慰めます」。

一コリント14:1-3
そして、言います―「あなたがた皆が異言を語れるにこしたことはないと思いますが、それ以上、**預言できればと思います**」。この場合の「預言」は、「神のメッセージを語ること」あるいは「霊の賜物を受けて神の御旨と御計画を宣べ伝え、説き明かすこと」を意味していると考えられます。そのように理解できるとすれば、今日の「説教」に近い働きであります。

●聖霊はあなたを招く

モーセは、「主の民すべてが預言者になればよいと切望している」と語り、使徒パウロは、「皆が預言できればと思います」と語ります。

「神の民」(LAOS)のすべてが、同じ賜物を与えられているわけではありません。しかし、羊飼いであったモーセを召し出されたように、また迫害者であったパウロを召し出されたように、聖霊である神は、LAOSの一員である「あなた」を、「みことば」のための奉仕に参加するように招いておられます。

●堅信式を思い出そう

わたしたち皆が受けた「堅信式」において、“**按手**”が行われたことを思い出しましょう。また、司式者は会衆に勧めました―「彼／彼女を祭司の一人、御国の同労者として受け入れ、共に福音の使節となるように、互いに祈りなさい。それで、わたしたちは、共に祈りました―「全能・永遠の父なる神さま。あなたの霊の賜物を与えて、一人ひとりをお世に遣わし、あなたの愛を証しするよう励ましてください」。

9. 実例A 説教準備のプロセス

「人間解放の宣言」—主イエスのマニフェスト—

- ① **初めに祈りをする** 何をするよりもまず、祈ります。説教の奉仕の機会を与えられたことを感謝し、会衆のために祈ります。そして準備のために、聖霊による照らし、きよめ、助け、導きを祈ります。
- ② **教会暦を確認する** この日は「顕現節第3主日」(C年)です。「主の洗礼日」を経て、“御足の跡を歩む”期節に入ります。主の宣教活動が始まります。
- ③ **ペリコペーを読む** 次に「ペリコペー」と「主日の祈り」です。
- | | |
|-------|--|
| 第一の日課 | エレミヤ 1：4－8 「エレミヤの召命」 |
| 第二の日課 | 1コリント12：1－11 「霊的な賜物」 |
| 福音書 | ルカ 4：16－32 「ナザレでの宣教」 |
| 主日の祈り | 「全能の神さま。あなたは権威をもって、御国の到来を告げ、教えるために、御子を遣わされました。悩む人に良い知らせを、悲しむ人に慰めを、囚われている人に自由を伝えるために、御霊の力を注いでください。御子、主イエス・キリストによって祈ります。アーメン」。 |

●まず福音書から

三つの日課のうち、主要日課である福音書から詳しく読みます。「洗礼を受けられた主」はいよいよ公的な宣教活動を開始されます。

マタイ・マルコ・ルカという三つの福音書は似ている点が多いので、「共観福音書」と呼ばれます。最初に書かれたのはマルコ福音書で、マタイとルカは、マルコをおもな資料として、そこに、ほかの資料から取った記事を合わせて編集したものと考えられています。

● 並行記事を比較

共観福音書はどれも「ガリラヤで伝道をはじめ」という記事を書いています。しかし、マルコ・マタイが、開始された伝道（ミッション）のメッセージを、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」という言葉で要約しているのに対して、ルカはその代わりに「ナザレで受け入れられない」という記事を用います。マルコ・マタイは、この記事を別の場面に設定しています。しかもルカは、「ナザレで受け入れられない」というマルコの記事を“枠組み”としながら、独自の材料を加えて、ガリラヤ伝道の要約としているわけです。

マルコ 6 章	ルカ 4 章
故郷ナザレに来て	故郷ナザレに来て
会堂で教える	会堂で教える ★朗読と預言の実現 (独自資料)
人々の驚きとつまずき	人々の驚き
主イエスの応答 預言者に関する諺	主イエスの応答 預言者に関する諺 ★異邦人の二つの例 (独自資料)
奇跡はわずかで、 不信仰に驚かれる	★人々の憤慨 故郷から追放される (独自資料)

④テーマを発見する

ここで、ペリコペーの三つの日課を並べて、共通しているポイントを見つけます。多くの場合、そのポイントが、その主日のテーマです。

●旧約聖書の日課

ペリコペーでは、福音書の主題に沿った内容の記事が、旧約聖書から選ばれています。

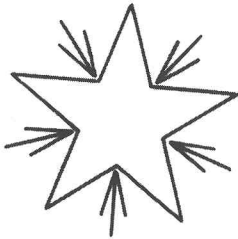
まず、エレミヤ書1章4～8節を読みます。「主の言葉」(霊)によって召されたエレミヤは「自分の民」からは歓迎されず、迫害されました。しかし、神の召命は、決して揺るがないものであることが、ここに語られています。

●使徒書の日課

次に、使徒書の日課を読むわけです。ペリコペーでは、それぞれの文書をなるべく継続的に読むように配列されていますが、その日のテーマに、ある角度からの光を与えます。

さて、この日の使徒書は、「神の霊によって語る人は、だれも『イエスは神から見捨てられよ』とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです」と語ります。この言葉から、ナザレの人々が主イエスを受け入れることができなかったのは、何よりも、聖霊の導きを拒んだからだということが分かります。

一コリント12:3



聖霊は、わたしたちが主の「解放の宣言」を聴き取り、「イエスは主である」と告白する力を与えます。また、聖霊は、「いろいろな賜物(カリスマ)を一人一人に分け与えて」、主のマニフェストを伝える者としてくださいます。

エレミヤを召し出されたのは、彼に臨んだ主の言葉(聖霊)でありましたし、主イエスの上に臨んだのも「主の霊」であります。さらに、今日の教会、すなわち、わたしたちを召し出さ

れるのも、「同じ唯一の“霊”の働き」です。

⑤タイトルを付ける

教会堂の看板に書かれる「説教題」は、道を行く人々の目に触れ、宣教のメディアとなります。分かりやすくするために、教会だけで使われる言葉を避ける場合もあります。しかし、あえて、聖書や教会の用語を用いることもできます。また副題が理解を助ける場合もあります。この説教のタイトルを、「人間解放の宣言」—主イエスのマニフェスト—としてみました。

⑥構成とその要旨

いよいよ構成です。この場合は「起承転結」の四部構成にして、その要旨を書いてみます。

(1) 故郷では歓迎されない

日本には、「故郷に錦を飾る」という言い方があります。栄光の座についた人を故郷の人々は誇りにするのです。

ところが、今日朗読された聖書には、正反対のことが書かれています。「預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」と主イエスは言われました。事実、主イエスが、お育ちになったナザレに来られたとき、故郷の人々は主イエスの栄光のうわさを聞いていたにもかかわらず歓迎しませんでした。主イエスの言葉を聞いた人々は「皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした」のです。

ルカ4:28、29

ルカ福音書は、これほどまでの反発の理由として、二つのことを挙げています。

* 主イエスの説教の素晴らしさに驚いたにもかかわらず、聖霊の導きを受け入れず、その説教者が、子ども時代から知っている「ヨセ

一コリント12:3

ルカ4:22 「子」であるという事実につまずいたから。

* 主イエスが「預言者は、故郷では歓迎されない」という諺を引いて、神の恵みがイスラエル民族には受け入れられず、むしろ異邦人世界が神の救いを受け取るようになる、と発言されたから。

ルカ4:24-27

(2) 主イエスの“マニフェスト”

ナザレの町の中心である「会堂」で、主イエスは、巡回のラビがするように、聖書を朗読されました。それはイザヤ書61章の冒頭の個所でした。「主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして、貧しい人に良い知らせを伝えさせるために、打ち砕かれた心を包み、捕らわれ人には自由を、つな

イザヤ61:1、2

がれている人には解放を告知させるために」。

主イエスは、洗礼者ヨハネから洗礼を受けた時、「天からの声」を聞かれました。神の民を解放する「メシア」としての使命を確認するように、故郷の人々に対して宣言されます—「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」。

ルカ4:21

わたしたちも、今日ここでわたしたち自身のこの耳で聞いています。貧しい人に「福音」を告げ知らせるといふこの預言は、いわば神ご自身のマニフェスト（宣言）です。その内容を一言で言えば、「人間解放」であります。

この「神のマニフェスト」を実現するために神ご自身が主イエスを派遣されたと語られたのです。「いつの日か実現するであろう」というのではなく、「たった今、実現した」というのです。この「今」は「キリストの時」を指しています。またそれは「永遠の今」であります。

(3) 故郷では歓迎されない…にもかかわらず…

しかし、このマニフェストは、ナザレの人々には、受け入れられませんでした。これは哀しい事態ですが、逆に、イエスという方が本物の預言者であることを証明しています。

自分の民族には受け入れられなかった預言者の一人が、エレミヤです。「母の胎から生まれる前に、わたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた」と神が言われたとき、エレミヤは固辞します。しかし、神はそれを許されません。「恐れるな。わたしがあなたと共にいて、必ず救い出す」と神は言われます。困難を極めたエレミヤの生涯は、主イエスの預言者としての御生涯と二重写しになります。エレミヤはこうして、キリストを指差しているのです。

(4) 聖霊である神が、私たちを派遣される

それにしても「故郷では歓迎されない」ということそれ自体は、人間の哀しさを象徴するだけです。しかし、福音書はそこに積極的な意味があると語ります。

それは、福音の受け手が、ひとまずは、イスラエル民族から非イスラエル民族へ移動したということです。単一民族から人類共同体へという福音の展開です。主イエスのミッションは、“故郷”から追放されたことによって“世界”へ、“わたしたち”へと向けられました。そして、聖霊である神は、今日ここにいるわたしたちを、21世紀の世界に派遣されるのです。

⑦ 祈りつつ説教壇へ

準備した説教は、一旦主に献げ、まず説教者自身へのメッセージとして受け取ります。そして、聖霊である神の導きに委ねて奉仕します。

10. 実例B 信徒による説教要旨

これは、共同礼拝で行われた、ある信徒の「説教」です。福音書を中心に構成されていますが、よく読むと、この主日に朗読される聖書日課に基づいた「ペリコペー説教」であることが分かります。初稿の段階から牧師に見せて、Eメールによるディスカッションを繰り返しました。これは、その要旨ですが、この信徒独自の霊的洞察に満ちています。

「こころが燃える」－主との出会い－
(復活後第1主日)

使徒 5：12-32 黙示録 1：4-18 ルカ 24：13-35

主イエスとの出会い

弟子たちにとっては、すべてが終わっていました。彼らの教団のリーダーは、つい一昨日、死刑による敗北を喫したばかりでした。弟子たちは、「あのナザレのイエスは長年にわたる他民族による支配からイスラエルを解放してくださる方だ」、「イスラエル王国を神が造ってくださる」と信じていました。しかも、教団のナンバー2であるペトロはイエス逮捕の夜に三度も主を否定し、一時は姿を隠してしまう有様でした。この二人の弟子たちは、ですから、お先真っ暗になっていたはずです。

さらには、女の弟子たちによる不可解な報告も気懸かりでした。墓に納めてあるはずのイエスの遺体が消えたというのです。しかし、復活を信じることはできませんでした。場合によっては、神殿関係者たちが、「弟子たちがイエスの遺体を盗んで、復活したとふれ回ることによって教団の力を保とうとしている」として取り締まる恐れもあります。距離的には決して遠くはない、半日ほどの道でしたが、二人にとっては気の重くなるつらい道でした。主イエスはそんな二人に近づいてきました。

隠されたキリスト

しかし、二人は近づいてきた人物が主イエスであることに気がつきま

せん。いつも共に行動し、とても尊敬していた人の顔を忘れてたり、間違えたりすることは普通では考えられません。ましてや弟子たちは二人連れです。一人ならまだしも、二人が同時にこのような決定的に間違ったことをするのはきわめて異常です。

これは、復活したキリストの大きな特徴であると言えます。復活したイエスが確かに隣にいて、自分に話し掛け、力づけようとしている。しかし、それがイエスであるとは、その時はまったく気づかない。あとになって、「あれはもしかしたらイエスさまだったかもしれない!」と思わせられる体験です。目の前にキリストがいても、心がさえぎられていれば、それがキリストであることが分かりません。しかし、心が開かれて、キリストであることが分かると、その姿は見えなくなるのです。

主イエスとの対話と食事

このようにして、弟子たちと共に歩き始めた主イエスは、ご自身について、すでに旧約時代から示されていた事柄を、説き明かしていきました。旧約聖書全体が語る人間救済のための計画は、キリストの苦難と復活によって、はじめて完成することを教えました。

そのうち、日も傾いてきました。弟子たちは、その人に「ぜひ！一緒に泊まってください」と頼みます。「無理に引き止めた」とあることから、「この人と少しでも長く一緒にいたい」という二人の強い思いが伝わってきます。夕食の席で、その人はパンを取り、賛美をささげ、パンを割き、二人に分けます。その時、二人の目は開けて、その人が主イエスであることが分かります。それと同時に主イエスは見えなくなりました。主イエスの姿は見えなくなりましたが、聖餐を受けた弟子たちはこの時イエス・キリストと一つになりました。主イエスは、弟子たちを不安の中に残して、離れてしまったのではありません。「キリストの体」と一つになった時、もはや見えるイエスはいなくなります。キリストは今も生きてわたしたちと共にいるのです。姿が見えている以上に近く、わたしたちの内に神であるキリストはおられるのです。

この物語の出来事は、礼拝の構造ととてもよく似ています。聖書の説き明かし、イエス・キリスト自身による説教があります。そして、イエス・キリストとの食事、聖餐があります。わたしたちは、この二人の弟子たちとまったく同じように毎週の礼拝でイエス・キリストと出会い、

イエス・キリストと一つになるのです。

心が燃える

現在の社会では、マスコミが発達しているため、わたしたちは多くの情報を得ることができ、世界の人々の様子を、映像を通して知ることができます。わたしの感じた範囲で、人々の「燃える心」と言えば、ベルリンの壁が壊されたときのことを思い出します。市民が喜びの声を上げながら、いてもたってもいられずに家を飛び出し、喜びを分かち合う光景です。必要があってしている訳ではありません。喜びが体を心を動かすのです。

復活なさったイエス・キリストがいることを知って、弟子たちの心はまさに燃えました。互いに興奮し、飛び出すように出発し、暗闇の道をエルサレムへ向けて、走るように取って返します。そして、キリストの復活の知らせを、ほかの弟子たちに伝えるのです。

主イエスは、わたしたちの闇の中に、いつのまにかやってきてくださいます。そして、意味がなくなった“わたしの目的”や、断念せざるを得なくなった“わたしの希望”など、人間が人間の範疇に閉じこもってしまうことによる暗闇から、“わたし”を解放してくれます。言うなれば「神からの真の喜び」に解放してくださる、「神の国」にわたしたちを連れ出してくださるのです。それがキリストの福音です。

もうひとりの弟子

最後に、今日のテキストで、主イエスと出会った二人の弟子について考えたいと思います。ひとりの名は「クレオパ」であることは分かっています。それでは、もうひとりの弟子はだれでしょうか。ある伝承は、使徒ペトロだと言います。また別の伝承は、福音書編集者ルカだと言います。しかし、どちらも確固たる裏付けには乏しいようです。

ルカの当時の編集意図に適うかは分かりませんが、わたしはこのもうひとりの弟子に、あなたの名前、わたしの名前を入れたいと思います。キリストは気がつかない形で、わたしたち一人ひとりに直接的な出会いを用意してくださっています。そして、わたしたちは御言葉を通して語りかけられ、主御自身が割いて与えられるパンによって、心が燃やされるのです。そうすることで、わたしたちもクレオパと共にエルサレムへ

の道を、もう日も落ちている漆黒の砂塵の舞う道を、喜びを持って進むことができるのです。

「一度は十字架の上に死んだが、復活し、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている」神、永遠の主イエス・キリストが、いつもあなたがたと共にいてくださいます。アーメン。 (2004/4/18)

あとがき

この小冊子を最後までお読みくださって、ありがとうございました。むずかしいと思われたでしょうか。シンプルすぎると感じられたでしょうか。いろいろご感想がとおりでしょうが、舌足らずであることだけは確かです。それは、ひとえに著者の力量不足のためであります。

しかし、LAOS講座は、信徒諸兄姉が、ご一緒にお読みくださり、話し合いをしてくださることを想定しています。またそこに、説教に専念しておられる牧師が共におられる場合は、必要に応じて不足を補い、豊かに展開してくださるにちがいありません。牧師方は、それぞれ与えられた賜物が違いますから、ここには書かれていない、すぐれたお考えや、やり方を持っておられるからです。

そのような意味で、この冊子は“教科書”ではありません。毎週、あなたが聴いておられる説教こそ“教科書”なのです。でも、この冊子をお読みになると、「説教」が基本的には「神の民・LAOSの務め」であり、「神の民・LAOS」は、その務めを「教職であるメンバー」にだけでなく、「教職ではないメンバー」にも委託することがある、ということに、改めて関心を向けてくださるとすれば、これほど嬉しいことはありません。

そして、読者ご自身が、「説教を聴く喜び」を深めてくださると共に「説教を語る喜び」があることを体験されますよう、聖霊である神の導きを心からお祈りしております。

参考となる資料

- ・ルーテルCSテキスト研究会発行：
教会学校児童説教・信徒説教者の聖書解説 **ルーテルCSテキスト**
（主日礼拝のための準備ノート）
- ・日本福音ルーテル教会東海教区教育部発行：
一教会暦による一 **信徒のための説教手引き** （A年／B年／C年）
- ・日本基督教団出版局発行：
新共同訳 新約聖書注解（I／II）・**旧約聖書注解**（I／II／III）

LAOS 講座 第2号 小さな一本の指

—説教の聴き方・語り方—

- 発行日 2004年10月31日
- 編集者 PM21 第2プロジェクト「証し・奉仕する信徒」委員会
委員長 齋藤未理子
カット：竹内 皓（1ページ）
瀬崎竜彦（28ページ）
- 著者 北尾一郎
- 発行者 「日本福音ルーテル教会宣教方策21」（PM21）推進委員会
宣教室長 推進委員長 徳弘浩隆
- 発行所 日本福音ルーテル教会 宣教室
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町1-1
電話：03-3260-1908 FAX：03-3260-1948
e-mail mission04@jelc.or.jp
- 印刷所 精文堂印刷株式会社
-

